

一茶翁俳諧文集
完

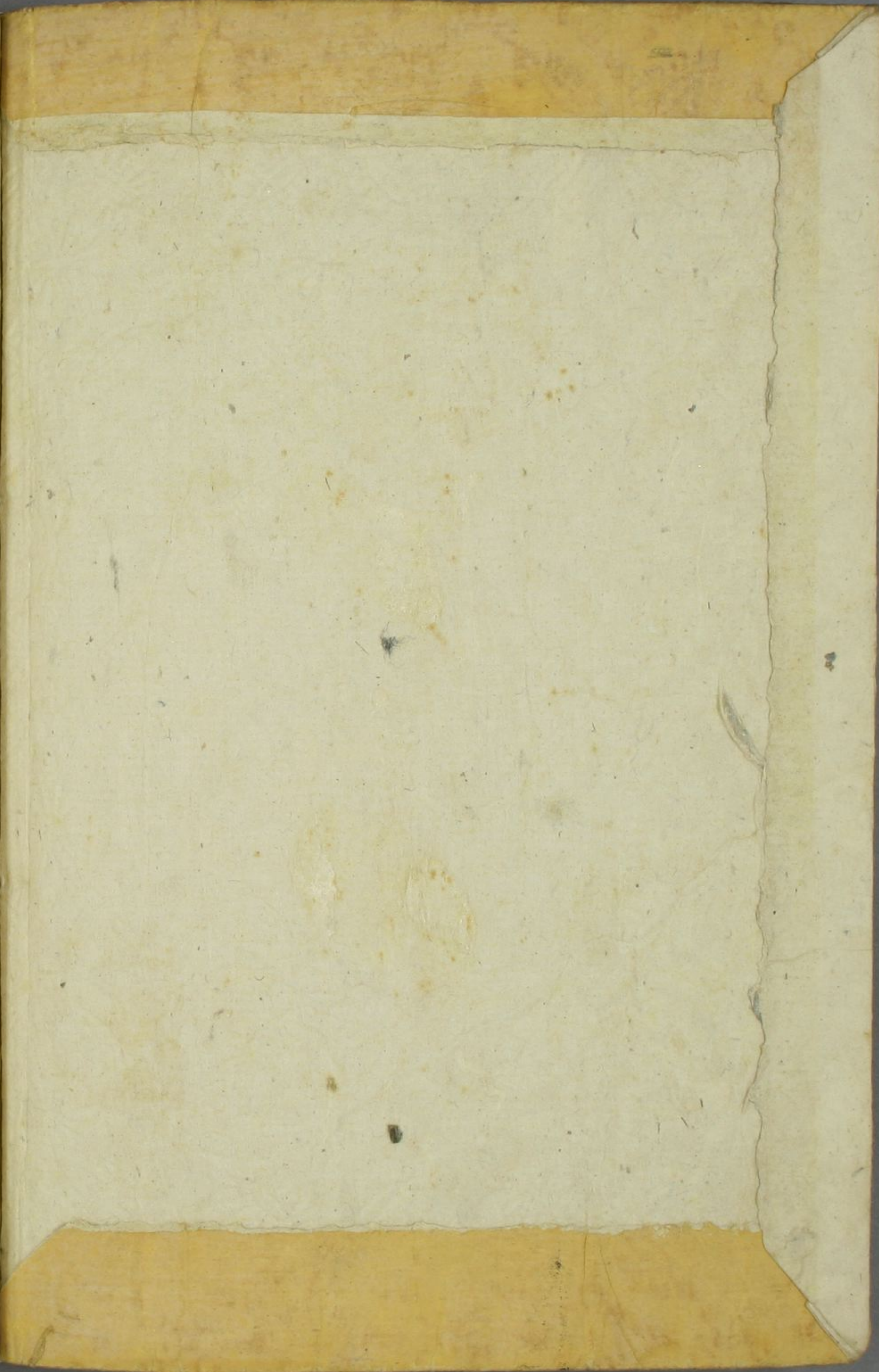
5
1795



5
1795



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text is very faint and difficult to decipher, but appears to be a formal letter or document. The characters are written in dark ink on aged, yellowish paper.





丹中かゝ信濃玉梅原の御祇寺
 一系翁の文書に云々とりて右
 き辭を今よかあゝくおろくも
 衣もあをあすりては並ふくあ
 せんおろひ侍をかきらるものをさく木
 子急りまらるも多しとて此肉筆
 字の稀きも水に年履するを
 有明庵のあゝく梅木よりしる



をいへば世にあらざるにありしを
潤事おほくおこしきまはる
みよひの書き涼しきまはる
あることあるをまねくこと
らんはるみちきよきまはる
よきまはるにありしを

赤水直実書

瓢湯僧

例禪

世にあらざるにありしを
潤事おほくおこしきまはる
みよひの書き涼しきまはる
あることあるをまねくこと
らんはるみちきよきまはる
よきまはるにありしを

夜者もあつてはるるに
因縁もあつてはるるに

初小正子春涅槃日

系部 系部始迄

阿尾

昔きんこの玉著甲するところより所より津土
を祓ふ上人の始に世に祝ひ下りて
ぞむけの初きん迎大井月夜ひよりつる小法師
よふ紙巻くしめ流るる聖の曉ふ巻くしめま
ときといひをりて本堂へもつるよふりぬ
小法師の元日の旦いまま偶しくいふ間ふ初鳥の
声とあつてくつたと起る教への下りる表門
を下りくと敲けの内よりいふことと同一時
西方弥陀佛より母始の使僧ふいと巻り上

了らんとやく上人裸足しておどろかして門の
 扉を左右へさつと開て上法座に上坐未だ
 してきりよのふゆ年がとくころわたりくは
 ぞとぞとく讀ていんく其世界ハ云苦充満ハ
 いふとぞとく其國ハ其まらハ 聖者出むるハ
 してまら入いよとま終りておどろと注ぎ
 たりとらや此上人とつとぞ其指く悲しきよ
 ころつたけとて神春の淨衣を縫りて着て
 洞をたて祝人とも物も狂くぬたて俗人

割て無常を演を礼とらと神から
 佛ハおいていんくハの骨張なり
 角々れそとていんく替りておのて
 ハ俗藝ハ地ハ世後る境界なり
 五音龜とけとての祝人ハ厄拂ハ
 口とめとてそとて思ひておのて
 吹けとて人屏風家ハくら空のやうな
 土門松とてす 煙とて瓦雪の山路
 乃曲り歌りてハの春也

春

二

白井

あつと任せてみんむく

目お交さちう位之り春一茶

了その五月もきく娘尔

一人おの難煮膳を形

這、笑、了ふなるをらう

文正二年正月一日

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

元日や上り春

後黄泉

元日もこの

層やありか

おてさるまも

門おまそひ

蓮葉やた

ここの世代の松

つもつやあも

此を伝ゆの美

来さやあの上

又あの上

初まも

月夜と

あつと

人の数

近きか

あつと

あつと

あつと

と一男つとむるは僕と上
 のもあつとささる
 名はあつと水踏る鳥うねり一茶
 水江春色
 する民も時や作る春の月
 あつと花盗人をとる一茶
 長光寺堂あり
 浜梅のあつと柳もあつと
 さつとあつと唄をれあつと
 振くとあつとあつと端折
 初年
 あつとあつとあつとあつと

白井

其のや草の
 ちのる角田
 一入や二入
 一入は成田石
 いくんとて袖
 は這まるとか
 ちのるのの
 陽をや白の
 一糸
 うけろのや
 ちのるのや
 そこのや
 ちのるの山

草のや草の
 ちのる角田
 一入や二入
 一入は成田石
 いくんとて袖
 は這まるとか
 ちのるのの
 陽をや白の
 一糸
 うけろのや
 ちのるのや
 そこのや
 ちのるの山

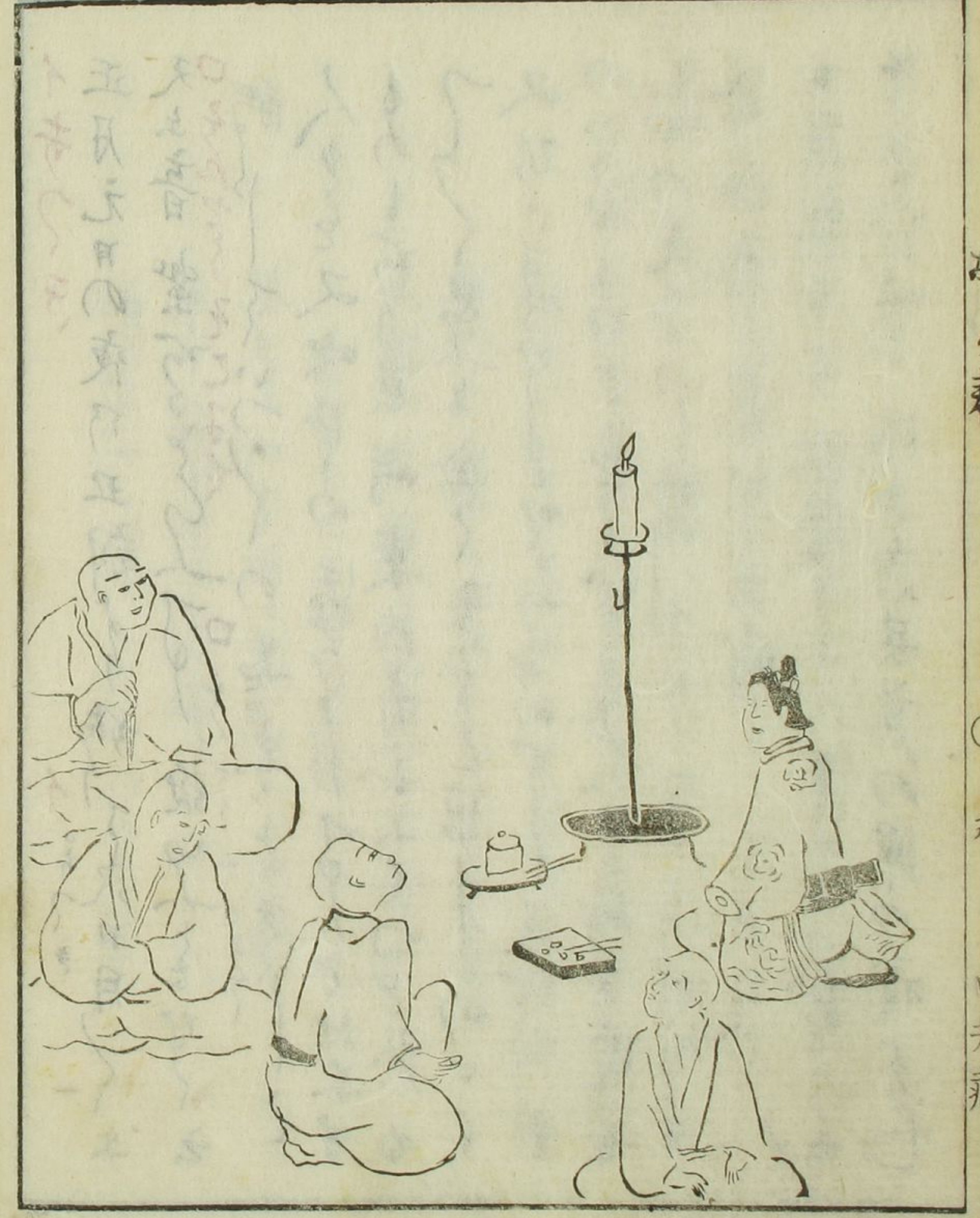
たりぬく鷹丸法師の親の正しくかた
 ぬきし草木園土悉皆成佛とるわびき
 も仏土は道口のみか
 口も

ひとり
 かきと
 松崎の小隅ハ草
 大猫の尻尾
 正月十七日
 不七
 柳
 柳

正月元日の夜に丑刻より始りて八日目く午
 天立音繁
 解
 人
 又
 の
 乙女
 今此天下
 七
 そ

白井蔵

美濃をたれい
 ふんをきりて
 芥のり
 香酒をたす
 ひろが
 おんひろひ
 味もこんひろ
 糸が
 切のこりや
 生れろりて
 形迫のこり
 小豆一席や妹
 ふりあて
 又新のり
 新のり
 上座よ味
 うまろり
 向くま



おのり

六

白井

梅のいこ
 象うや
 梅をたて
 玉川や
 おん
 産
 うて
 初
 春
 や
 福
 借奴



おのり

六

白井

けやうか未世を
 揚ぐけけ
 山標内を
 ちやうをそと
 一宿さよ標ハ
 ちやうをそと
 下くまきて
 夜も標か
 好くやこの
 としやちを
 海子ある
 ちやうをそと
 南江の
 とての
 孫よま
 とくそ
 永日まき
 後生仏
 秘せつけし
 子のせん
 や

ちやう
 あくさこま
 脈をちや
 夜月
 扇まそ尺を
 とくそ
 牡かか
 ちの子か
 さんまを
 牡か
 けーてけて
 扇をちの中
 を通る
 知のちの吉日
 指し後果が
 扇をち
 扇をち
 扇をち
 扇をち

小世路の天窓、かつる扇くね
 竹の子と糸よく熟く花の子
 八梅崎や二軒並んで煤かひ
 谷家標
 這りくる標の下よりほくき
 ちやうをそと
 人歌町
 人歌町茶屋をこをそと
 今とて一罰もあつて
 蚊くちやうか
 せうか
 卯の花を一人きりの社うね

幽栖
 虫うしと尺とちやう
 ちの里仕包てととと
 卯つむと扇をち
 とくそ
 戸隠山
 辰のちをち
 此入りか
 了蚊のち
 長川と天窓用心てちやう

白井藏

宋文公勸
學文
勿謂今日
不學而
有來日
勿謂今
年不學
而有未
年日月逝
矣歲不
我延嗚
呼老矣是
誰之愆
杉乃や扇を
まのふある
麻のふあ
さしを
まのふあ
い二形代子氏

日：懈怠、不惜寸陰
 此の日は棒ぬり出さず又
 無限欲有限命
 此の不足の之を坐
 起の欲目引張る青田
 古の蠅と人なき
 直きせや小舟花も蓮の
 松陰や夏草一つの
 三交搔く時、時と暮夜
 行息、ゆるゆる入る
 一茶
 舟童唄

形代子氏
 杉乃や扇を
 麻のふあ
 さしを
 まのふあ
 い二形代子氏
 小足をも
 むつら
 夕涼
 涼
 幸
 涼
 二
 涼
 涼
 この

夕涼の花を沖てくむ
 大螢申
 田中川
 今暑し
 松の露
 今と
 舟

ぬれ赤る煙う
 夕暮とせむる
 君は獲て日和
 土ふ山すめが
 君の泣くを
 あつては
 赤れが
 赤らつてあや
 屋を待仕と
 のこひろふ
 夕かけや望ま
 小狼のま花
 もち
 田の人の足
 ちりり
 なるさうだ

杖立や隅の
 小まき
 小柳
 むと星よ
 披家せん
 稲の花
 娘星のお歌
 をうくま振
 うか
 ふんと
 夕かけや望ま
 七日の夜は
 早さ
 夕かけや望ま
 赤のま
 赤のま
 赤のま

一と一と何と何と
 の花もさくさく
 をやめり側ふむ
 してさるおき
 つたかー是も
 て作らるを
 化すよそ
 喜むの價
 きりし
 ぬの
 ふを

紙屑と何と何と

蛙の子の
 戯る蛙
 死なう
 を彼らつ
 らるよ本
 衣と
 ふ和漢
 ぶらり

蛙の理送

卯の花もあろく

門の月暑の
るる人もの

月七月を
く大の
月を引

佛子山の月
佛子山の月

江戸川や目
江戸川や目

芒舟
芒舟

蛇七入宮ハ
蛇七入宮ハ

指をよ
指をよ

張太師
張太師

秋の未さま
秋の未さま

のりや
のりや

言系
言系

人有と兄
人有と兄

田舎小原
田舎小原

山畑やその
山畑やその

白こも
白こも

そのとさ
そのとさ

あつと
あつと

ひつと
ひつと

い、カシイ
ろ、ホツトリ
モノタナア



婦人を替へて... 又幸所人と百人を
うりしとて替へて引かえ... 狂氣の...
くおの... 今ハ独り... 昔双紙なと
い... 拾遺物語... 蛇の執念... 血節
をやす... 命おき... 殺すハ罪
魚も... 茶

福多や福
 梅干いさ
 今ぬ
 福水あや
 筆のふい
 声て福の
 唐人七
 年このり
 此も人
 とくし
 南のめん
 あり年の
 神の灯や
 屏をま
 もちと
 屏のあ
 くけよ
 てくち
 りんち

弟あや
 七人さ
 小せよ
 西のよ
 とくち
 せつさ
 ねさ
 めさ
 六十八
 が

生とらめりぬ

夕々霞あしくさし目の上の
 幸夷あし花の望くこりり一茶

其引

子とくらの蒲団山崎の種綿宗盛
 竹の雪正勝をよ紅雪のす未達る

ろくきま未達の子の良の蠅紅雪井ん

貞享四丁未達卯紅雪仙
 葛の繩目未達知申紅雪るさ未達き紅雪り未達ぬ未達

ま未達子未達を未達も未達さ未達る未達 塚未達の未達名未達を未達け未達て未達 芭蕉

下部ひそく首未達埋め未達る未達

継母乃又未達に未達く未達る未達 夜未達の未達ぬ未達 未達

山木未達回未達く未達き未達て未達 弟未達の未達血未達を未達ぬ未達る未達 芭蕉

口つ未達なる未達世未達を未達す未達 母未達の未達流未達 凡流

小未達き未達土未達滴未達の未達り未達く未達 弟未達の未達子未達を未達ぬ未達る未達 芭蕉

き未達り未達る未達と未達学未達の未達心未達を未達き未達て未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

学未達よ未達な未達と未達さ未達ハ未達な未達を未達を未達ち未達わ未達り未達き未達

小未達綱未達や未達伊未達き未達母未達や未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

親未達の未達な未達子未達ハ未達と未達こ未達も未達知未達き未達る未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

と未達子未達も未達く未達噴未達を未達も未達も未達心未達細未達く未達大未達き未達の未達人未達を未達り未達せ未達

す未達し未達く未達る未達の未達富未達木未達管未達な未達と未達積未達く未達る未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

亦未達踏未達り未達て未達長未達の未達日未達を未達く未達る未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

長未達と未達り未達り未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

永未達と未達れ未達を未達新未達く未達 弟未達の未達心未達を未達き未達て未達 芭蕉

孫太郎

昔大和を立田村にむくつげき女河ひま子
 の咽を十日にわたるより殿を腕をせひら
 りし上りて見知り所の石地蔵のきんぎょ
 としんを油もどろせんとある女まゝ子ハ
 ひまをさきかきく石仏の袖もすくす
 志しく祈りひるふぬきやぬ石仏大に
 吹てあしりく巻ひのふさすのまゝ母の角も
 目つきりおしそぬより新うぬる子と
 福さすぬくをてくとらるとぬん長地
 蔵かきち今にありておの供物せし
 さうり

かみ餅や菰の仏も春の風一茶

こそこの麦竹植る日乃てあらしき節茂き
 うき世にけりきくも娘あつたものきと
 かれ進名なまきくま下り 誕生日祝ふ
 ぼひよりてうちく所を天窓をく
 つくくぬりかきくおたり子どもの風車
 とらよものなまを志きりおひらてむつを
 ほとけとせりるをやうむやくやく
 ぬつて換へ所 祝の執念邪く直外物
 赤心つててそこをある茶碗を打破り
 そせ七世を倦て障子けらす絆をぬり
 くむるふよくくとかあを海と

思ひきやらしくと笑ひてびとあしりふむり
 ぬ心のうち一点の莖も那く花月のきりり
 く清くえ申せると迹なき能優えるやうふ
 ちりく心の皺を仰しぬ又人のあつて
 りんくハどこもといへを犬と指しあはく
 へと向へて鳥よ申びさすさぬ口もとより先
 とを教こが望てあひくくいと春の
 初日のよ胡蝶の齧るもよもなき
 ぞへ傳る此おさ那佛のせりもひり
 追夜の夕暮る持佛堂の蠟燭とト
 芥たつてをどこも居てもいそはく這よ
 さるびのちいさきふな合せてなんむく

と唱へて声志わたりく申くたつては務く
 そむつてよとのきりらるるいくのよれは
 いきき願うも志なく波のあせまる齡を
 秋陀きめむすぬも志つてうく月日は
 費やすてそこ子のおかもつて川と
 と思ふも其世を還けたをや地獄の終は
 蒔て後よあつて蠅をみみ孫を巡る
 蚊をそりり刺仏のいま酒を
 天む折るは月さといと海くかふ
 けもくの踊の声のすもをちり小椀投
 けり片いさきよきり出て色を上げよ
 似てらるけなるなつてつていり

おのれ

廿

白井菴

かきおもやう石壁のきけふなりてちとらそ
 なるしんころ廿五井の管絃くもとせる
 まさうそ無味の口さならんと新力ふつ
 老を忘せしうさななんをくくかく
 日すうそくうの角のつうの石もふ是を
 ろこかきまといふる。那くそあひつう
 おうおひ日のくけるど眠る具うちを
 母の正月と思ひ殿焚をこく掃かつて
 園扇ひくく行ささるて園上泣色のする
 目のさる相界とさくぬかかく抱き起て
 ううの畠上尿やうて乳房のうさすはく
 吸ひなうむな板のうさく。おれをきて

よく笑ひ顔を作るお母は長く胎内
 のくくひと日く襦袢の編りきも
 かとく忘る衣のくく玉を
 帰るやうなてきさうて一入あるな
 あうまはわう

蚕の迹かきかうて糸原乳が一茶
 ようく思ひあせうお児をこあひ連上
 とと愛り集ぬ

柳うらむんそあてあそま
 甚菜ふなんむくといふみ
 幸問へる片もあすや更衣
 お児のけま祝

蜻蛉のりくハとことけりてりハ千代
なしてあきくく歌も心よ浮りてりハ
とまろしけりてりハ

夜之夜中よ換子の注進ハ

母も浮るるの望やえつりてりハ

為家ハ

換てけりてりハ換子のけりてりハ

世もまろしけりてりハ

兼輔ハ

人の親の心ハ周よけりてりハ

子も思上りてりハ

菟ハ其言ハ
一年ハ下りてりハ

頌曰

未^レ舉^テ歩^キ時^キ先^ニ已^ル到^ル 未^レ動^ク古^キ時^キ先^ニ説^キ了^ル
直^ニ説^キ著^ク在^リ機^ニ先^ニ 更^ニ須^ク知^ル有^リ向^テ上^ニ竅^ニ

貫^ル人^ノよりてりハ

御^レ川^ノとてりハ

大^ニる^テ扇^ニてりハ

曲^者隱^キてりハ

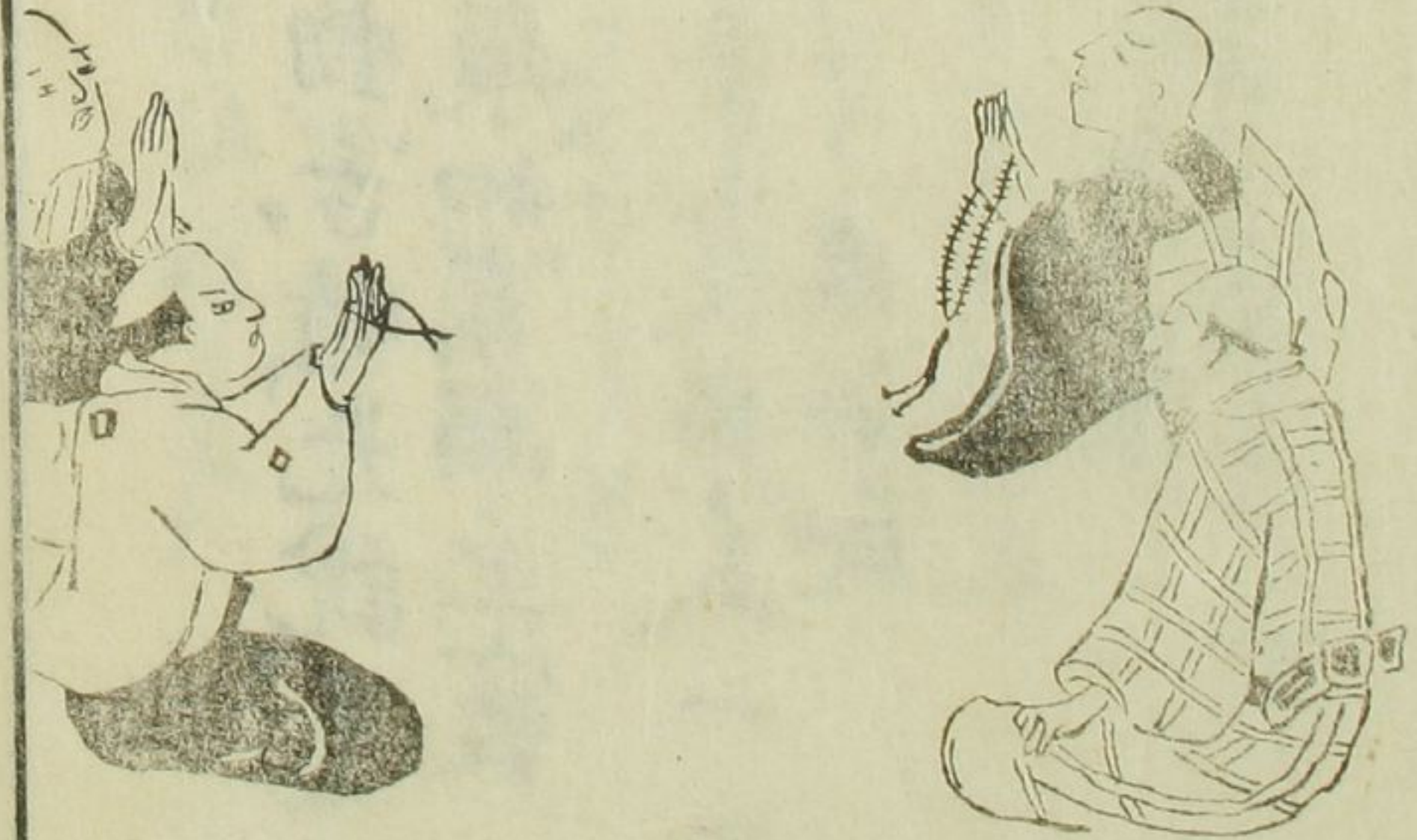
何^レもを^テ蚊^ノのついと古^キ井^ニ忍^ビひり

大山^ノ詣

四^立間^ノの末^ヲ力^ヲ加^ハつてりハ

を^テ扇^ニ冠^シてりハ

白井^ノ歳



紫乃里進き何〜とある門外炭団夜
 けり思き算身せ〜と籠伏せ〜と
 くるも長夜就〜と夜す〜と長家の上
 鳴〜と長さよ

子思一人聞か〜と
 声を身の鳴あ〜と一茶
 盗人か〜と
 業の〜と
 席の〜と
 不便さ〜と

人眠き〜と
 箒の下〜と
 乳を吞む鹿〜と
 立志

白井清

白井蔵

さすのさつ男も警切りしハかりありおん所
かのせたりつハかく信濃黒姫山のせし
下りの小隅たりきハ雪ハ是きくく霜ハ秋
ぬる物も枯のりしとあくるのそら
百木千草とて冬よりくつハ枯るよとく
く雪ハさるハなごり

九輪草四五草て仕包り一茶

法西八郎為耕人礎らつ所也

時を蠅虫ぬらとよりくつ

鹿の子や横をくそ人

老翁岩を腰にけし一軸をさつる

これ汝を行と久し

幽栖

永家と恰好きつひま

ニと通人をきよくつ

志望長よハくハぬくハぬとや

成蹊子こぞのそつひま不言人とめり

となくし学望のをも因り此

を

つら玉の何知りも枯木立

白壁をわがさやや木下陰

まうり物くらハ此草の墓とみ

をを吐くにつぎ

赤い花の榮耀はる

史記李廣
傳賛桃李
不言下自
成蹊

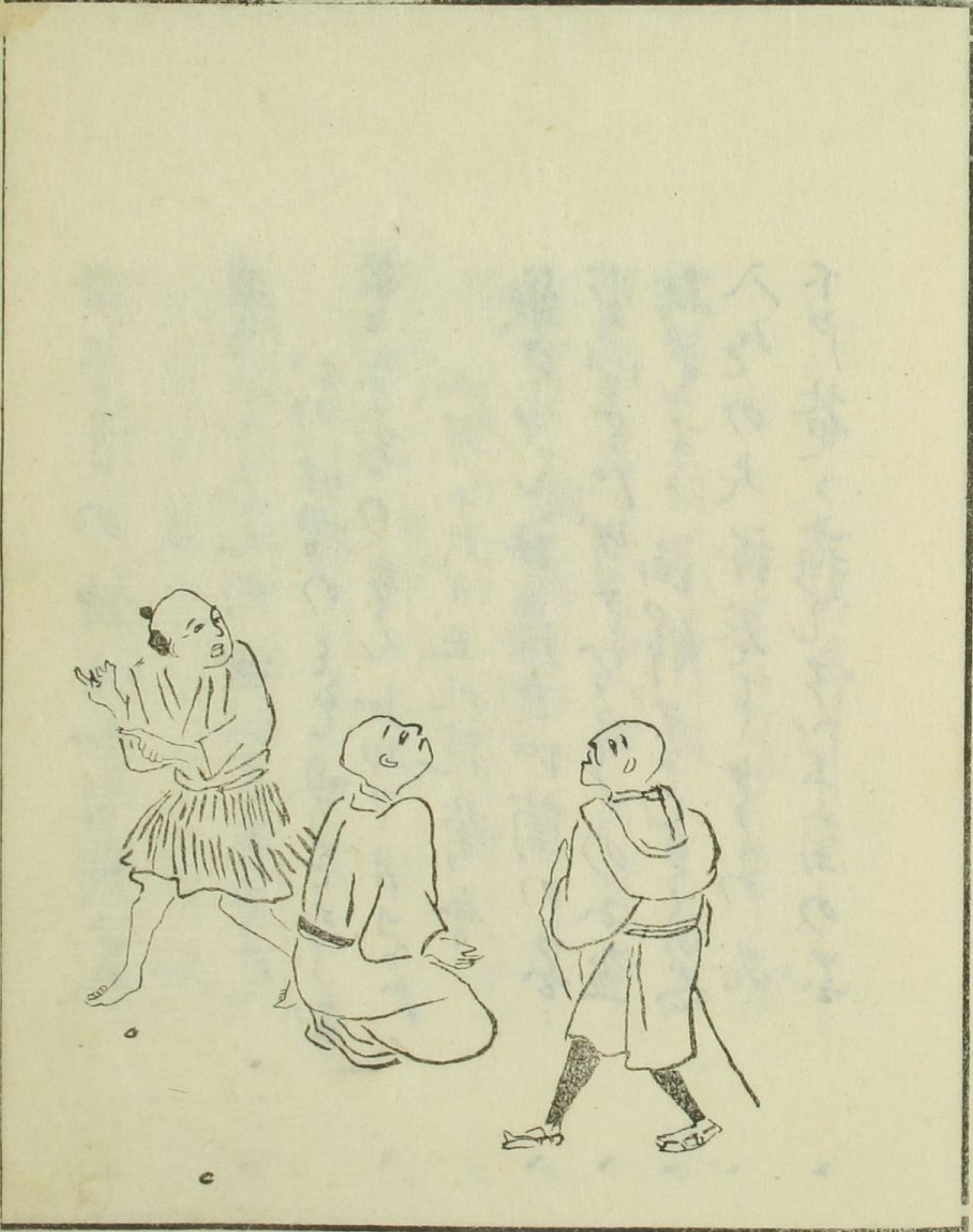
白井蔵

立ちしつゝ大木の下に大木を分る一き者の
の腰をわけておとすもよふこととて
なんふの詭言を大木を牛をかき
聖の古本ありてちんちん所ハ菓
もあつてしるふ其下を申きて人
目くとりほつてハなかりり

十五夜ハ寺并野梨本氏にあり

古のむらじゆ一人月三十一茶
月蝕皆既亥七刻在方ヨリ 飲子六刻甚ク

人ぬ八月よりせん一飲
人の世ハ月もなほまゝなり



白井藩

酒上、月の飲る如目利る

酒上、月の飲る如目利る

おの味増のこを喰を志る

昔の夢をのぞく如く月を

九月十六日正凡院菊會

秋さけし神農自や菊の玉

菊の玉やゆきかゝるのふ

秋さけし 画解するこきく

入るの大神巻くきくの花

下戸菴く癒しえふ菊の玉

まど女安島

まど女安島

秋の玉をたててまど女安島

まど女安島

山さきの輪彩けりく

秋の色をんく

蟻蛸や五分の塊見え

まど女安島

秋の玉をたててまど女安島

まど女安島

秋の玉をたててまど女安島

白井藩

若僧の扇面よ

秋風吹来吐る夜道の草歩き一茶
 せんぬ村なんとのりけり清き白飛
 散陰やとて酒屋のちし西土英
 老樂
 子ももをさびしむ心長きぬ一茶
 蟬のよや唐箕のむらり光
 小曲なを縄目の吐はらぬ
 戸速いせりおろろよ
 小便所をとりて一夜宿み
 煙草すぬぬいし生るぬの流るる

まるくかたきひしなをぬるる茶一茶
 穂ハ蒼葉もくもく空をうらみ
 へつり塗摺扱しるをふ
 ぬりやをまつしやせむと立
 炭の虫や虫の祝の咳をぬ
 三杯、設く本意のしぬ
 木もくもくかたきひしなをぬるる茶一茶

善光寺門前憐じ履

まるくの縁四五文や夕陽をぬ
 火根引拍子こころ小僧ぬ
 をつ雪のゆきけり家虎ぬ
 木もくもくかたきひしなをぬるる茶一茶

茶島... 三十四... 白井藩

茶島をぬきしるしる十度一茶
雪ちるやちりいぬ志なみ花
能わい罪も又なりを竹

強盗をて

ルも

張る蒼とくく夜の雲

彼見とくしも雲吐を雪佛

お食うお福ふちきる指南

餅花、僕、まことより

餅花

かまやるぬ柳の枝よちうなる

子のまゝに就もするこ算きい

東ふちしとて中途

とてあつるよ

掠るし、吸るはくぬ一茶

護持院原

あつとや廿四文の遊茶を

西国橋

寒垢離、やぶらの竜の控宿

かま川をりてとちりし

人さくつるよひとを籠り

一いぬみお下りて志く好

つちりお吹きり名刺の地を交

まつりやまうあつる

江のり

三十五 日本

自力の張本人きましくい問ていらくい程
ふ心ほしくんうらゆ流業ふ叶ひ付りぬ
答ていしく別ふふむくふ子細か不存い
きも自力必力何のうのう茶アサギもくをさき
とちくう沖流てきて存するう一大了
ハ其方おぬ東の市前ふ後ちて地獄なり
とも極楽なりとも何なるは極の市ちるい
次第おそちさきとくさう中りせと市於中
ちくく之ぬ則決定ての上もそなるい
えん仏とい人の下より欲の網ををるの
野よも長蛇のけりひて人の目をまぬ
世後る序のやそめよも茶田水ちる

く盗心なきゆゆしく持るうもあきうるい
何なるち作りきくきんやに不及流
もすも仏ハちるう人見則當流
の安心とて中し究かに

もかくも何たるに任せのうの茶一茶
カ十七 齡

又正文ここき十二月廿九日

親善上人

隔る地獄極楽よく交え
只一念の志ハさなるり

親善上人
隔る地獄
極楽ヨク
キレバ只念ノ
ニハサケリ

白井藏

此山の草末中 此中何處なる海なる由
書傳 此山が所の家へいもあつた
其時 山へつたゆゑにいもあつた
我輩 山へいもあつた



一茶者山林文信濃水日航柏木村人通字弘大寺号 非裕寺
文政十年十一月十九日 授年廿五 荊河國日新月原山明
專寺 善院所御存言田井設瑞泉寺也
并所明寺守言は後之風調美濃流去武坊深傍也
始為錦風素丸人後夏目城美隨身

三浦定家再記

住黒坂山下

修然坊無事 乃海の一海人
つた坊いもあつた人へいもあ
たつた坊いもあつた人へいもあ
つた坊いもあつた人へいもあ
つた坊いもあつた人へいもあ
つた坊いもあつた人へいもあ
つた坊いもあつた人へいもあ
つた坊いもあつた人へいもあ

日牛蔵

